

「I was born」の授業

最終回〈全5回〉

渡辺良光

『父』は、『胃の腑を開いても 入っているのは空気ばかり』の『蜉蝣の雌』の腹に、『卵だけは腹の中にぎっしり充満してほっそりした胸の方にまで及んでいる』のを見た。『それはまるで 目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが 咽喉もとまで こみあげているように見え』、『友人』に『<卵>という』、『友人』も『肯いて』、『<せつなげだね>』と答えてくれたことを語る。そして、『そんなことがあってから間もなくのことだったんだよ。お母さんがお前を生み落としてすぐに死なれたのは』と続けた。そんな『父』の話聞いた『僕』は、『痛みのように切なく』『ほっそりした母の 胸の方まで 息苦しくふさいでいた白い僕の肉体』というイメージを『脳裡に灼きつ』けた。

『白い僕の肉体』と『蜉蝣』の卵の重なり。さらに『白い女』との重なり。『僕』の生と『お母さん』の死は擦れ違っただけで、まるで『僕』と『白い女』が『ゆき過ぎた』だけでも重なっている。(これを強調すると『白い女』は、いよいよ「幽霊」「母の幽霊」となってきた。)重なりはまだある。『父』の『蜉蝣』の『卵』を見た時の印象『生き死にの悲しみが 咽喉もとまで こみあげている』と『友人』の『肯いて答えた。<せつなげだね>』という言葉の重なり。さらに『僕』の『白い僕の肉体』のイメージも『切なく僕の脳裡に灼きついたのである。(しかし、言葉を厳密に扱う詩人が『せつなげ』『切なく』と、表記を変えて表現しているのだから、違ったニュアンスを与えようとしているのかもしれない。)重なりと言えば、『白い僕の肉体』のイメージが『脳裡に灼きついたのである。』ように、若かりし『父』も『生き

死にの悲しみが 咽喉もとまで こみあげている』イメージを脳裡に灼きつけていたのではないかと。そうでなければ、『人間は生まれさせられるんだ。自分の意志ではないんだね』と突然言う『僕』に、こんな話ではできないだろう。そして、『僕』が「作者」となったのか、「作者」が『僕』を造ったのか分からないが、『父』のように「読者」に語りだす。これらの重なりが、「合わせ鏡」のように、この詩を永遠のもの、普遍的なもののようにしていると感じる。

『せつなげ』『切なく』のような表記の面では、説明できないものがいくつもある。『或る夏の宵』と『或日』の送り仮名の有る無し。読点は、詩のほとんどで、一字空けで代用されているのに、『うきでるように、白い女がこちらへ』『生まれてから二、三日で』『或日、これが』『見ると、その通り』の箇所は「、」読点を使っているのも説明できない。また、会話文と思われる箇所は、「」かぎ括弧の代わりに「——」棒線が使われているが、終了の方の「——」に句点「。」が付いているのは、『父』の話の最後の『死なれたのは——。』と、『僕』の胎児のイメージの『白い僕の肉体——。』だけである。『父』の話の中の会話文と思われる箇所には<>山括弧が使われているが、『友人』の会話文と思われる『これが蜉蝣の雌だ』には、<>がない。『友人』の蜉蝣の『説明』部分にも<>があって、不自然とは思えないのだが使われてない。<卵>と<せつなげだね>は、強調の<>なのだろうか。表記の面では、説明できないことが多い。

以上、「I was born」を題材にした考察を終える。これは「考察」であって、実践した授業ではない。こんな「発問」ばかりが

続く授業は、私が実際に勤務した二校目の実業高校では、生徒の集中力が持たない。詩句の意味調べなど、「常識的」な語句まで含まれているのは、逆にその実業高校を想定しているからである。

私の実際の授業では、これらの発問を、取捨選択して授業を行った。もちろん「私の鑑賞」にも触れたことはない。残りの発問は、その時々生徒の学力に合わせて、選択（教師の思い付き）しながら触れたり、触れなかったりした。

この詩の根幹は、蜉蝣の卵が、『白い僕の肉体』につながり、さらに『白い女』につながっている構成にあると思う。詩句の意味を考える上では、『生き死にの悲しみ』の解釈に尽きると考える。あとは、「指示語」が重要なポイントで多く使われているので、それをしっかり押さえていけば何とかかなると思う。イメージとしては、『ところが 卵だけは腹の中にぎっしり充満してほっそりした胸の方にまで及んでいる。それはまるで 目まぐるしく繰り返される生き死にの悲しみが 咽喉もとまで こみあげているように見えるのだ。つめたい 光りの粒々だったね』『ほっそりした母の 胸の方まで 息苦しくふさいでいた白い僕の肉体』といった箇所が大切だと思う。

今となっては、私の教えた生徒たちが、この詩の授業を通じて、詩の言葉の重さやその発見の面白さを感じてもらえたものと信じた。この一文で現役の国語教師の一助になれば涙が出るほどありがたい。

最後に、茨木のり子の解説の一部を紹介する。

「頼んで生まれてきたんじゃないや」と憎まれ口をたたき子供も多く、それなのに、ああしろ、こうしろとうるさくて、割の合わない話と、子供時代には誰もが漠然とそのように感じています。受身形で与えられた生を、今度は、はっきり自分の生として引き受け、主体的に把握しなければならぬのです。考えてみれば、つじつまの合わ

ない、かなり難解なことを、ひとびとはやっつけてのけているわけなのでした。

そういう認識に美しい形を与え、読む人の頭をすっきり統一してくれます。かげろうの話、母の死が陰影となり、一人の人間の生誕が持つ奥行き深さ、生誕にまつわる神秘をも開示してくれています。」

茨木のり子は「詩のこころを読む」の他の解説で、「逃げるわけではありませんが、散文ですっきりときほぐせ分解できるものならば、それは詩ではありません。散文で解析できないからこそ詩なのです。」と書いています。

ゾクッとします。でも、私は国語教師でした。国語で書き表された「詩」を、生徒たちに分かってもらうのが、私の務めでした。この一文が「お節介」なものでないことを・・・。

《追記》

吉野弘がいつ頃、「I was born」を書いたのか、この文章を書いている途中で調べました。昭和27年・1952年11月だそうです。なんと26歳の若さで、この詩を書いたということです。しかも、雑誌「詩学」への投稿2作目だそうです。ちなみに処女作は、同じ年の6月、やはり「詩学」へ投稿した「爪」という詩だそうです。

そして、詩集「消息」に、この詩を載せたときは、『<つめたい 光りの粒々だったね>』の箇所が、『<淋しい 光りの粒々だったね>』だったそうです。昭和34年・1959年発刊の「幻・方法」という詩集に再録されたとき、今の詩のようにされたようです。（了）

全5回にわたる渡辺良光さんによる「I was born」を扱った誌上授業はいかがでしたか。この連載中、様々なご感想が編集部へ寄せられました。日く、「思ってもみなかった読み方」「私が生徒だったら・・・」「そこまで解釈する必要ある?」「もっと自由に読みたい」・・・。渡辺さんの今回の提起は、このような視線を予め踏まえた上で、「学習材としての詩」を題材にした「考察」であり、多くの国語教師が悩む「教科書で何を教えるか」を考えるための「試行」であることを、何卒ご了承ください。そして、最終回までこの連載をお読みいただいたことに、筆者共々深く感謝いたします。（編集部）